

大台町観光振興計画

三重県大台町

令和4年6月

目次

1章 大台町観光振興計画の策定について

- 1. はじめに2
- 2. 計画期間2

2章 大台町の観光の現状

- 1. 観光に関する現状3
- 2. 観光の課題6
- 3. 観光地としての特性7

3章 大台町の観光の基本的な考え方

- 1. 大台町の観光が目指す姿8
- 2. 本計画における基本目標9

4章 本計画の推進

- 1. 各主体の役割13
- 2. 連携体制のあり方15
- 3. 進捗管理16

大台町観光振興計画基本体系図18

策定の過程・策定委員19

用語解説20

1章 大台町観光振興計画の策定について

1 はじめに

本町は、名古屋市から約 130 km、大阪市から約 190 km、三重県の中南勢地域に位置します。

面積は 362.86 km²あり、その内 93%を森林が占め、大台ヶ原を源とする一級河川「宮川」が町の中央を東流し、町全域が大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパークに登録されています。また、宮川の源流部は吉野熊野国立公園、上中流域が奥伊勢宮川峡県立自然公園に指定された自然豊かな町です。

平成 18 年に紀勢自動車道の大宮大台 IC が供用開始となりましたが、その後さらに南部へ延伸し、令和 3 年には尾鷲北 IC と尾鷲南 IC 間が整備され、熊野大泊 IC までがつながりました。平成 20 年には新名神高速道路の供用も開始され、本町を含む三重県南部地域へのアクセスは飛躍的に向上しました。

国の観光立国推進閣僚会議による「観光ビジョン実現プログラム 2020」には“観光は、成長戦略の柱、地方創生への切り札である”とあり、この言葉どおり、多様な業種がかかわる裾野の広い産業のため、観光入込客の消費行動は、新たな雇用の創出、地域経済の活性化へと繋がることが期待されます。

しかしながら、現在は、新型コロナウイルスの感染症拡大を受け、観光業のみならず様々な業種がその影響を受けています。全国規模での緊急事態宣言などによる移動や飲食店等への営業時間等の自粛要請により私生活以外にも、諸事業も制限を余儀なくされています。これからは with コロナの時代における、“新しい生活様式”の視点をもった観光振興を図る必要があります。

これらの背景、また、ニーズや情報などが目まぐるしく変わっていく世の中において、本町らしい観光のあり方を追求し推進するため、大台町観光振興計画を策定します。

2 計画期間

第 2 次大台町総合計画を最上位計画として位置づけ、本計画期間は第 2 次大台町総合計画後期の計画期間に合わせ、令和 4 年度から令和 7 年度までの 4 年間とします。

しかしながら、観光を取り巻く情勢の変化は激しいことから、適宜見直していくこととします。

2章 大台町の観光の現状

1 観光に関する現状

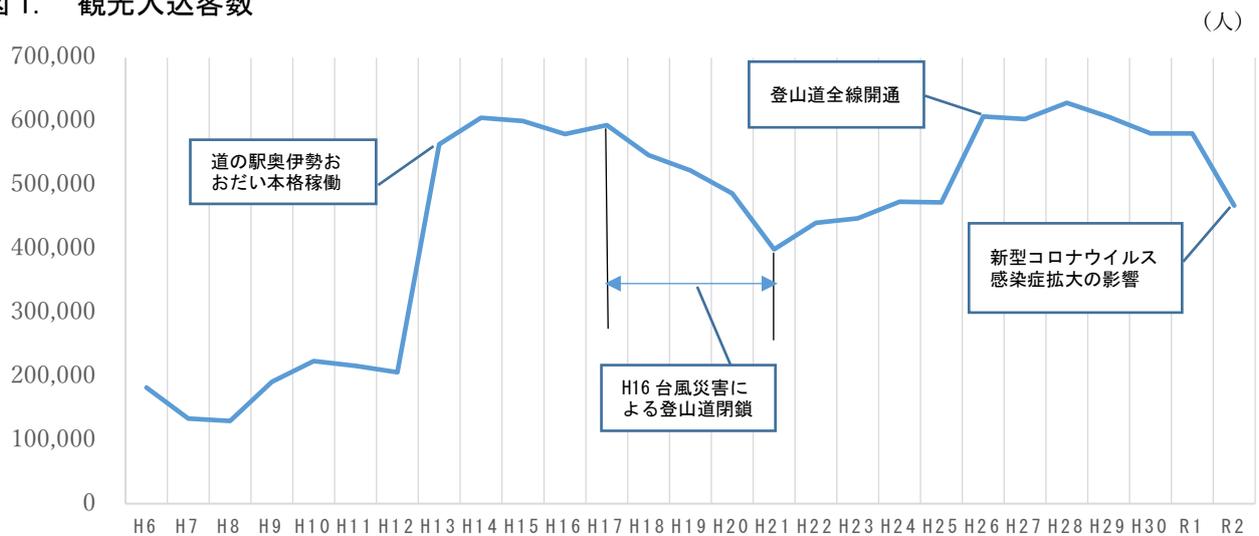
平成の初期は、川での友釣り、アマゴ釣り、大杉谷林間キャンプ村・宮川敷でのキャンプや川遊びが主流で、入込客数は182,411人（平成6年）でした。

その後、ふるさとプラザもみじ館、奥伊勢フォレストピア、道の駅奥伊勢おおだいなどの開業により、新たな顧客獲得につながり入込客数が飛躍的に伸び、令和2年の入込客数は、468,001人となりました。

その後、農林漁家民宿の開業、環境教育やSUP（用語解説P20）・カヤックなどのアウトドアの展開など、新たな取組みが生まれ、地域の魅力が引き出されています。

また、行政関係者を主体とした視察団体客、大学生によるゼミ合宿・卒論合宿など、いわゆる観光とは異なる入込客も少なからず存在し、入込客を増やすための取組みとして、可能性が期待できます。

図1. 観光入込客数

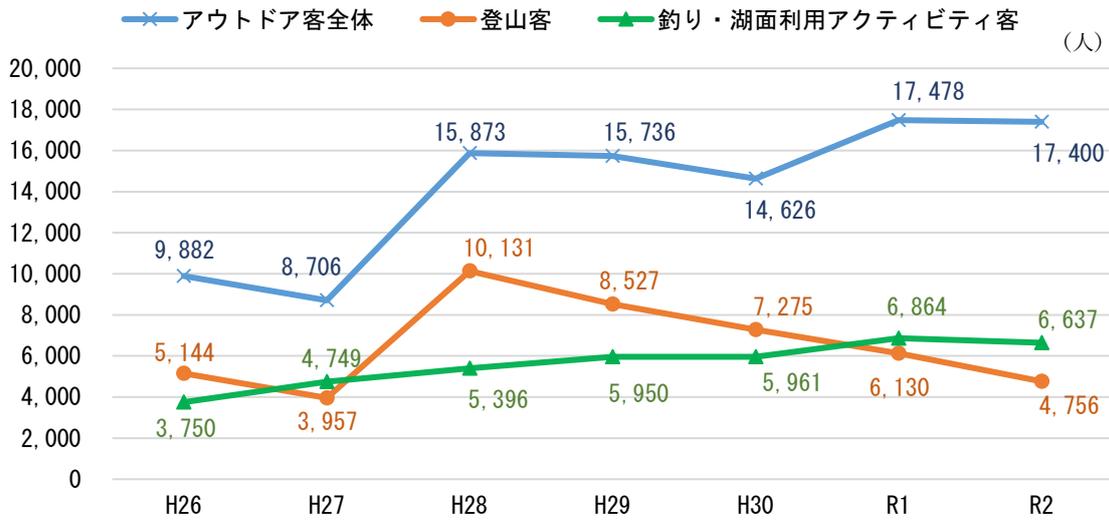


(人)

H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
547,167	523,164	486,958	399,310	440,693	447,985	473,795	472,781	607,631	603,740	629,349	607,276	581,238	581,147	468,001

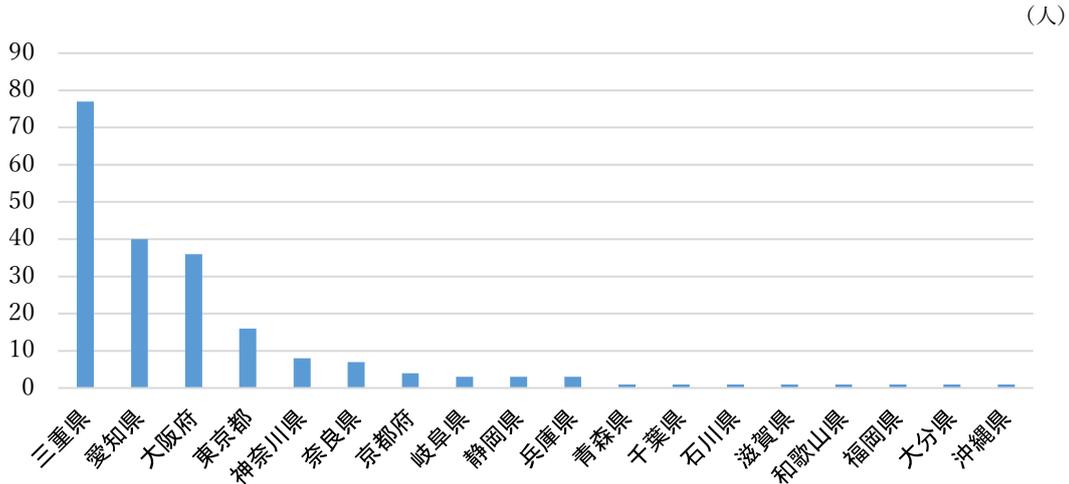
出典：大台町観光入込客数調査

図 2. アウトドア客数



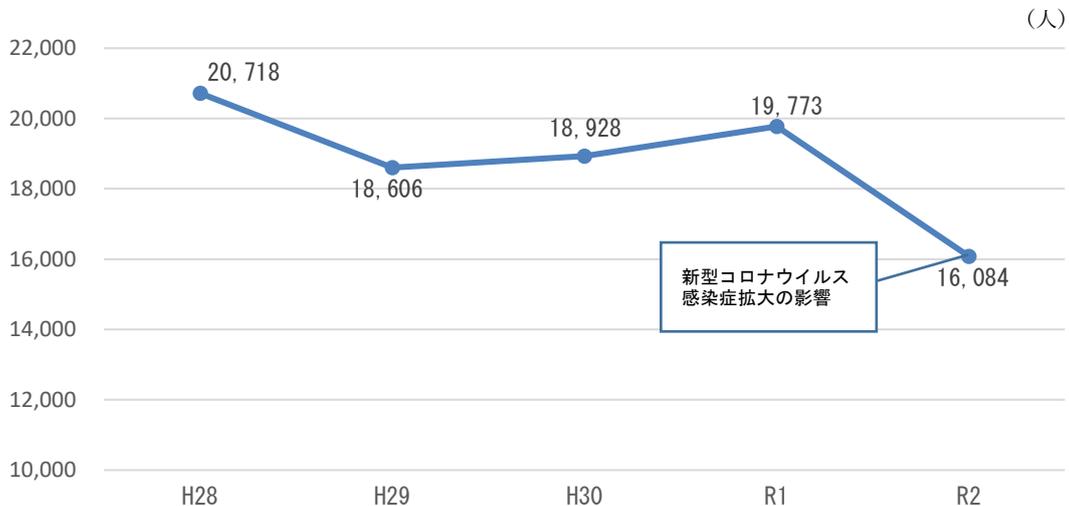
出典：大台町観光入込客数調査

図 3. 来訪者の居住地域



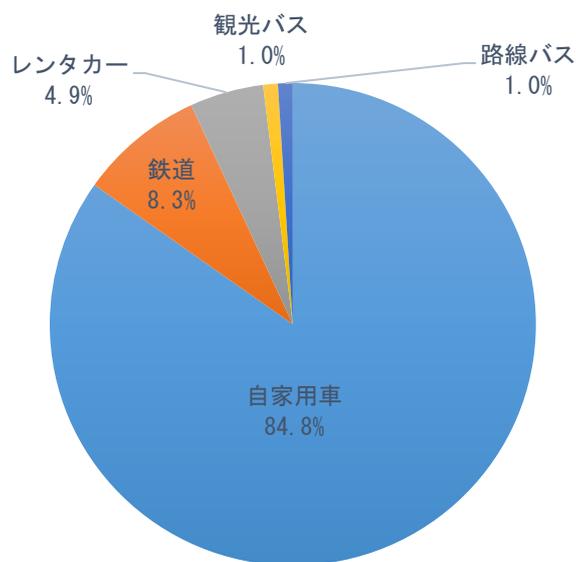
出典：大台町観光地アンケート (H30~31)

図 4. 宿泊者数



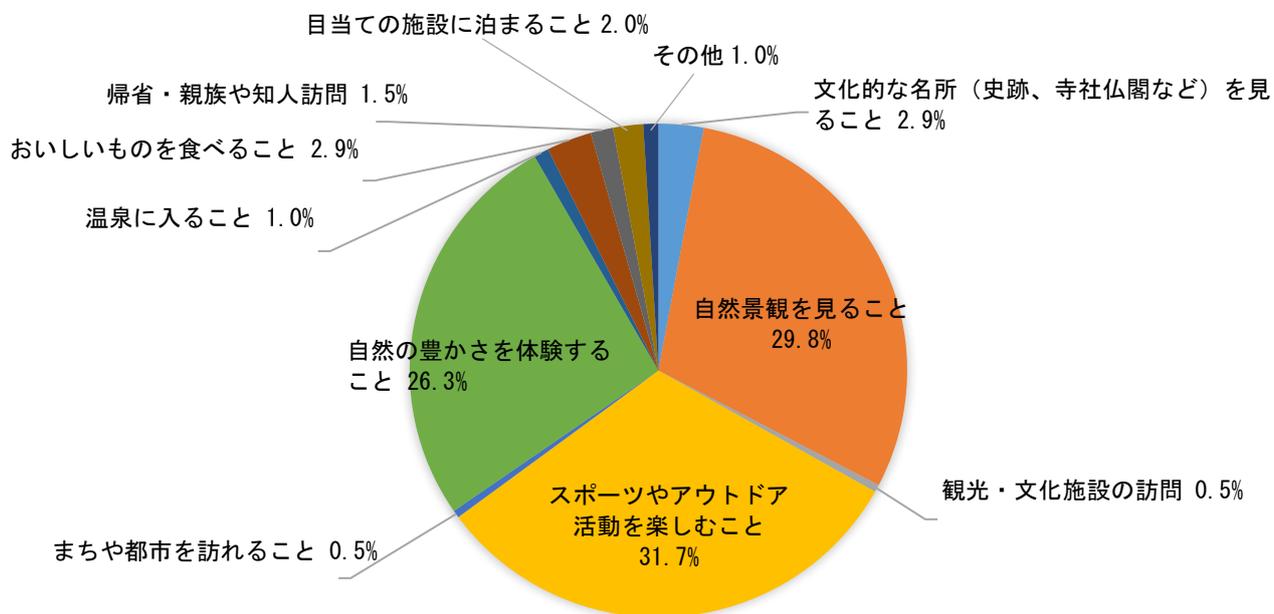
出典：大台町観光入込客数調査

図 5. 大台町への交通手段



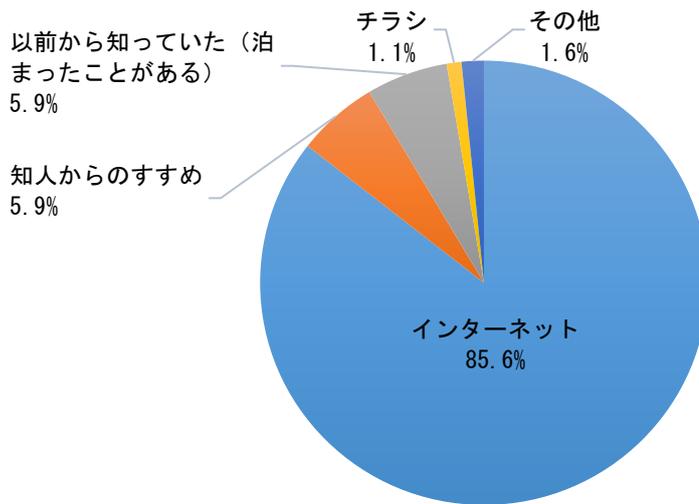
出典：大台町観光地アンケート(H30～31)

図 6. 大台町での観光の楽しみ



出典：大台町観光地アンケート(H30～31)

図 7. 来訪動機



出典：大台町観光地アンケート（H30～31）

2 観光の課題

【交通手段】

町内には、JR 紀勢線の栃原駅・川添駅・三瀬谷駅・滝原駅の4つの駅がありますが、決して利便性が高いとはいえません。宮川地域は、町営のバスが運行していますが住民生活の移動としての利用です。また、大台地域は民間の路線バスに加えてデマンドタクシーが運行していますが、宮川地域と同様にいずれも観光というより住民生活の移動としての利用です。このように、観光目的の来訪者が公共交通で町内を巡ることはほとんどありません。登山目的の来訪者には民間事業者による登山バスが運行されていますが、それ以外の町内観光スポットへの移動は、スポット間の距離が長いため、その手段が課題となっています。

【環境保全に対する意識】

本町は、自然豊かな町で美しい景観が自慢ですが、最近では少子高齢化、過疎化の影響で山林や田畑に人の手が行き届かないため、荒地と化し、空き家も増え、これら景観の荒廃は、今後益々悪化していく傾向にあります。

また、元々は地元の憩いの場や運転者の休憩を目的につくられた公園が、近年のアウトドアブームとロコミにより、多くの人が集まる結果となり、ごみ問題など環境保全に対する啓発が急務となっています。

【体験コンテンツの造成とガイドの育成】

本町は日帰り観光客が中心となっており、観光消費額の増加を目指すには、滞在観光客の増加を促進する必要があります。アウトドアに加え、他の体験コンテンツの造成も求められるとともに、体験内容によってはガイドが必要となるため、ガイドの育成も重要となってきます。

【冬季の集客】

春から秋口までのハイシーズンには多くの観光客が訪れていますが、オフシーズンの集客は低迷が続き、大きな課題となっています。

[インバウンド (用語解説 P20) **客の受入れ環境整備]**

近年、日本の農山漁村に関心をもたれる外国人が増えてきており、新型コロナウイルス感染症拡大前には、本町にも年間 1,000 人を超えるインバウンド客が訪れていました。今後は、新型コロナウイルス感染症の収束後を見据えた外国人の受け入れ環境の整備も考えていかなければなりません。

3 観光地としての特性

本町は、大台ヶ原を源とする一級河川「宮川」が町の中央を東流し、全域が大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパークに登録されています。清流宮川は、国土交通省が実施する全国一級河川水質調査において、水質が最も良好な河川に何度も選ばれていて、その源流部は吉野熊野国立公園、上中流域が奥伊勢宮川峡県立自然公園に指定されている豊かな自然を有する風光明媚な町です。

ユネスコエコパークは、“豊かな生態系を有し、地域の自然資源を活用した持続可能な経済活動を進めるモデル地域”であるとして登録され、まさに本町の観光振興の考えの礎とすべき言葉が目的として掲げられています。

また、町内には熊野古道伊勢路も縦貫し、伊勢と熊野を結ぶ古の道が今なお多くの人を魅了しています。この道は、町民の皆様の自発的な取り組みにより沿道の名所が復活・整備がなされています。

これらを背景に、様々なアウトドアプログラムや、歴史・文化の探訪プログラムの創造に繋がっていて、創意と工夫によりいかようにも町の魅力を伝え、観光入込客の増加につなげる可能性を秘めています。

本町の主幹産業は、林業と農業などの第一次産業であります。その他、製材所や特産品加工など商工業もあります。これら産業も観光資源と成り得るものであり、新型コロナウイルス感染症が拡大するまではインバウンド客にも好反応が得られ、観光入込客数の増につながっていました。

3章 大台町の観光の基本的な考え方

1 目指す姿

自然と人びとが共生し、未来へつなぐ観光振興

“森にとまる・水とあそぶ 大台町” まちのすべてが持続可能なアウトドアフィールド

本町は、国際機関であるユネスコからも認められた豊かな生態系を有し、地域の自然資源を活用した持続可能な経済活動を進めるモデル地域です。（認定地域数：131 개국 727 地域。うち国内は 10 地域。）※2021 年 9 月現在

豊かな生態系や生物多様性を保全し、自然に学ぶとともに、文化的にも経済・社会的にも持続可能な発展を目指す地域づくりのモデルとして高く評価されたエリアです。

豊かな自然環境は、観光のみならず産業はもちろんのこと、私たちの暮らしをこれまでもこれからも支えてくれる次世代に大切につなぐべきものです。町民も来訪者もすべての人々が自然と共生する意識をもって、自然に負荷をかけず未来へつなぐ観光の振興を目指します。

このような観光振興を目指すことで、町民の地元への愛着・郷土愛が高まり、心豊かな暮らしにつながるものと確信しています。

2 基本目標

基本目標1

地域の資源を守り、活かす観光の推進

本町の自然豊かなフィールドや魅力ある観光資源を守り、活かした観光振興を進めます。SDGsの視点に立った観光を推進します。

《取組方策》

①地域の特色・資源を活用した魅力ある観光地づくり

本町の豊かな自然や特化した資源を保全・活用し、地域の特色を活かした魅力ある観光地づくりを進めます。

- ・大杉谷登山道の保全・活用
- ・清流宮川の保全・活用
- ・熊野古道伊勢路の保全・活用
- ・ダム湖の保全・活用
- ・地域の散策道・四季の景観スポットの活用
- ・地域資源を活用した教育旅行の誘致
- ・奥伊勢フォレストピア及び周辺の保全・活用
- ・Trip Base 道の駅プロジェクトとの連携 など

②アウトドアアクティビティの充実

釣り、登山、沢登り、ボルダリング（用語解説 P20）、SUP（スタンドアップパドル）、カヤック、カヌー、キャンプなどに加え、ペットと飼い主のアウトドアなど、性別・年齢を問わず、自分に合わせたアクティビティを選択できるアウトドアを推進します。

- ・アウトドアアクティビティの開発
- ・ガイドの育成

③環境維持協力金制度の確立に向けて

本町は自然と人間が共生するモデル地域として登録されています。安全安心に楽しくアウトドアフィールドを利用するためのルール・マナーづくりや自然環境リテラシー（用語解説 P20）の向上を図るための環境維持協力金制度の導入を検討するため、分析調査を実施します。

- ・アンケート調査の実施

基本目標 2

満足度向上とリピーターを増やす観光の推進

「CRM（顧客管理）システム」、「EC（電子商取引）サイト」を活用し、顧客データを収集・蓄積し、顧客とのつながりを大切にすることで信頼関係を構築し、顧客満足度を向上させるとともにリピーターの獲得・関係人口の増加につなげます。また、観光案内所において、来訪者のニーズに合った案内を行い、満足度の向上につなげます。

《取組方策》

①積極的で効果的な情報発信と観光プロモーション（用語解説 P20）

Web サイトや SNS（用語解説 P20）等を活用して、町の魅力や旬な情報、旅の提案などを積極的に発信するとともに、効果的なプロモーションを行うことで町への誘客につなげます。

- ・ 観光協会 Web サイト・SNS の活用
- ・ 動画配信サイトの活用
- ・ 観光プロモーション

②観光案内所におけるニーズに合った案内

観光案内所において、来訪者が求める案内が十分行えるよう、案内所職員がおもてなしの心をもって対応します。

- ・ 観光情報の充実化
- ・ 多言語観光案内への対応
- ・ おもてなしの対応

③おおだいファンクラブの確立

ニーズを把握し、顧客に対して的確にアプローチすることで顧客満足度を高めるため、顧客管理システムの運用を行います。またこのシステムの有用性を関係者と共に理解し、冬季の誘客にもつなげます。

- ・ CRM システムの活用
- ・ EC サイトの活用

基本目標 3

観光消費額の増加につなげる観光の推進

本町でしか味わうことができない高付加価値の観光による魅力的な滞在コンテンツや体験型サービスの提供、町内及び近隣市町の観光事業者や組織との連携により一人当たりの観光消費額の増加につなげます。

《取組方策》

①農林漁業など産業を活用したプログラムの展開

国内観光客はもとより、インバウンド客に対してもアプローチするため、本町の魅力的な農林水産資源・商工資源の掘り起こしを行い、体験プログラム等に活用していきます。

- ・農林漁業の観光資源調査とその活用
- ・商工業の観光資源調査とその活用

②魅力的な滞在コンテンツや体験型サービスの充実

本町の美しい環境であるからこそ提供できる魅力的な滞在コンテンツや高付加価値の体験型サービスなどを造成・提供して、来訪者の宿泊日数・滞在時間を伸ばし、一人当たりの観光消費額の増加につなげます。また、町内周遊ルートの形成を行い、安全で環境に配慮した移動手段の確保を図ります。

- ・農泊の推進
- ・周遊手段の確保
- ・周遊ルートの形成

③道の駅奥伊勢おおだい環境整備

道の駅奥伊勢おおだいの環境整備を行い、来訪者が快適に利用できる空間を確保するとともに、隣接して整備された宿泊施設利用者等に新しい旅のスタイルを提案し、観光消費額の増加に繋がります。

- ・道の駅奥伊勢おおだいの環境整備
- ・新しい旅のスタイルの提案

④三重県・市町連携による観光情報の発信と誘客促進

三重県・他市町と連携してスケールメリットを活かした効果的な情報発信と誘客促進を図ります。また、広域連携して誘客が図れるよう各種協議会等も積極的に参画し、費用対効果を高めるとともに滞在時間・滞在日数を増やす広域的な観光地づくりにつなげます。

- ・松阪・明和・多気・大台圏域観光連携事業推進協議会
- ・三重県ジャパンエコトラック推進協議会
- ・南三重地域活性化事業推進協議会
- ・南部地域活性化推進協議会
- ・伊勢熊野観光連絡協議会
- ・三重県観光連盟
- ・道の駅観光連携協議会

基本目標 4

観光をきっかけとした関係人口増加による観光の推進

観光による交流人口はもとより、観光や一時滞在をきっかけとした関係人口の増加による観光の推進を図ります。

《取組方策》

① 誘客の多角化により関係人口（用語解説 P20）増加につなげる観光の推進

町の魅力が感じられる滞在コンテンツ（用語解説 P20）・体験型サービス等を造成・提供して、観光や一時滞在をきっかけとした関係人口の増加につなげる観光を進めます。

- ・ テレワーク（用語解説 P20）やワーケーション（用語解説 P20）施設の情報発信
- ・ サテライトオフィス（用語解説 P20）の誘致
- ・ 空き家バンク・空き店舗バンク制度の情報発信
- ・ 移住定住につながる体験型プログラムへの支援

4章 本計画の推進

1. 各主体の役割

本計画を推進するためには、町民、観光事業者、観光協会・DMO、行政が協働で進めていく必要があり、各主体は以下の役割を担います。また、DMO と行政が主体となり、本計画の進捗管理や効果検証を行います。

町民

心癒される里山の景観、四季折々の表情を見せる豊かな自然景観、先人から伝わる様々な技術を次世代につなげます。また、メリット・デメリットを含め観光がもたらす影響についても理解し、本町の観光に興味・関心を高めるとともに地元への愛着・郷土愛を育み、心豊かな暮らしにつなげます。

観光事業者

本町らしい自然環境の価値や個性を活かした質の高い観光コンテンツを造成し、町民や観光者に提供するのはもちろんのこと、農林業など地域に根差した観光コンテンツの造成による地場産業の活性化につなげます。また、それらの魅力を事業者はもちろん、参加者自らが発信するような仕掛けづくりを進めます。

インバウンド客の受け入れ準備も重要です。多様化する観光者に対応するため、IT ツールの導入などの業務効率化により、観光者と交流する時間の質の向上や観光事業者の自己研鑽、二次交通を含めた他事業者との交流・連携を図ります。また、後継者の育成にも努めます。

観光産業に大きな影響を及ぼす感染症等拡大の状況下においても、安心して楽しめる観光として、地域の魅力再発見や地域間のつながりを強化することで新たな魅力向上が期待できるマイクロツーリズム（用語解説 P20）を推進し、新たな旅のスタイルを提案します。感染対策を徹底して、安心・安全な事業者であることも発信します。

商工会・観光協会・DMO

DMO 候補法人である商工会が多様な関係者と合意形成を図り、観光協会と連携して、本町の観光のかじ取り役を担います。

本町ならではの観光コンテンツを造成する地域の観光事業者（ガイド）を育成、支援するなど人材育成を行います。また、地域で行われるイベントを支援し、町民の自発的な集客意識の向上を図ります。各種データを収集し、これに基づいたマーケティングや顧客管理を行うほか、行政と協力してターゲットに向けたプロモーション・情報発信を行い、誘客に努めます。

DMO の成長と活躍は、地域の活性化に資するものであり、本町への観光を目的とするインバウンド客を含む多様な来訪者によって地域内消費が活性化されるよう、DMO 候補法人である商工会が観光協会等と連携してその仕組みづくりに努めます。

行政

近年のニーズに即した施設整備などインフラ環境整備を進めるとともに、観光フィールドの適正な管理に努めます。ガイド育成や観光事業者の育成支援策を構築し、関係各機関との観光振興に向けた調整・支援を行います。

観光協会・DMO と連携して WEB・SNS 等のインターネットツールを活用し、ターゲットに届く情報発信やプロモーションを行います。また、近隣市町との広域連携による観光振興にも積極的に参画します。

2. 連携体制のあり方

本計画は、行政だけではなく、観光に関わる様々な実施主体や利害関係者の羅針盤としての役割を有することから、それぞれが観光の担い手として相互に連携しながらも、役割分担に応じて主体性を持って取り組みを進めるための体制が求められます。

ここでは、本計画に則って観光振興を図るための連携体制の在り方を示します。

(1) 行政における関係課間の連携強化

観光への取り組みは、地域の多様なプレイヤーが参画し、経済、社会、生活環境に大きな波及効果を及ぼすことから、分野別の枠組みを超え「第2次大台町総合計画」や「大台町まち・ひと・しごと創生総合戦略」と整合・連携する必要があります。本町においても観光振興に向けた連携・協働を円滑に進めるために関係課間での連携を強化します。

(2) 大台町観光協会の体制強化

本町の観光振興を推進していくうえで、中心的な役割を担う観光協会の体制強化を町と商工会がサポートしていきます。その上で公益的な機能を発揮し、顧客満足度を高めていけるよう連携します。

(3) 観光関連事業者・組織間の連携強化

本町では、先述した農泊推進対策や「地域資源を活用した観光地魅力創造事業（平成29年度）」、「国立・国定公園への誘客の推進事業（令和2年度）」などで宿泊事業者、観光事業者と協働してきた経緯があり、この経験を活かしていく他、観光客の嗜好に応じた様々な観光商品・サービスの開発や情報発信を円滑に進めるため、今まで以上に連携を強化します。

(4) 商工業者や地域住民が主役となった観光振興の支援

地域に観光客を呼び込む着地型観光を進める上では、実際に観光客と触れ合い、もてなす地域住民が主役となることが重要です。様々な有志団体の連携機会を創出し、情報やノウハウの集積など観光振興の実働の部分を担当する商工業者や地域住民などに対して、観光客誘致や人材育成、制度設計など様々な面で支援・協働します。

3. 進捗管理

本計画で目指す「自然と人びとが共生し、未来へつなぐ観光振興“森にとまる・水とあそぶ 大台町”まちのすべてが持続可能なアウトドアフィールド」の目的の達成に向けて、毎年度目標数値の進捗管理を行います。

本町の観光に携わるすべての主体は、本計画で定める目標数値や各施策の進捗状況を共有し、継続して自ら積極的に取り組むことで、各施策・事業の更なる展開・拡充を図ります。

(1) 目標数値

	項目	基準値 (令和2年度)	目標値 (令和7年度)	(評価対象目標)
1	大杉谷入山協力金 収納率	33%	50%	(基本目標1)
2	大台町観光協会ホ ームページPV数	306,064	550,900	(基本目標2)
3	宿泊客数	16,084人	21,300人(総合計画)	(基本目標3)
4	一人当たりの観光 消費額	・宿泊 16,600円 (県24,013円・中南勢15,592円) ・日帰り 4,370円 (県4,817円・中南勢3,063円)	・宿泊 18,600円 ・日帰り 4,900円	(基本目標3)
5	教育旅行の誘致	3件	12件	(基本目標4)

[基準値について]

- 1 大杉谷登山センターへの聞き取り 2 大台町観光協会への聞き取り 3 大台町独自調査による観光入込客数調査
4 DMO候補法人への聞き取り 5 県南部地域活性化局へ聞き取り

(2) 本計画におけるSDGsの取り組み

SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) は、「誰一人取り残さない」持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標であり、平成27年の国連サミットにおいてすべての加盟国が合意した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で17のゴールと169のターゲットが掲げられています。

SDGs17のゴール

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

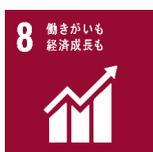


一方、観光は裾野が広い産業であり、社会や経済、自然環境に及ぼす影響が大きいことから、「持続可能な観光」の実現を目指す本計画においても、SDGsの17のゴールのうち、特に以下の4つのゴールを意識して取組みます。

大台町が観光振興において意識していく4つのゴール



【解説】



貧富の格差が拡大しているといわれる今、地球のみんなが幸せに暮らすためには、ディーセントワーク（働きがいがあり、十分な収入が得られる仕事）をいかに実現できるのか考えていく必要があります。様々な業種がありますが、観光業を通して地方を活性化させ、土地の文化を伝えるという働きがいのある雇用の創出を促進していかなければなりません。



実行したらそれで終わりではなく、より良い雇用創出や、地方の文化振興・産品販促を持続するためにきちんと結果を把握しようというものです。生産者も消費者も、地球の環境と人々の健康を守れるよう、責任ある行動をとらなければなりません。



観光業界は、海洋に大きく影響を与えます。海洋に流入する河川が汚れてしまうと海洋環境にも影響を及ぼすことになります。海の豊かさを守るためにも河川の豊かさを守るという意識を持たなければなりません。



森林を持続可能な形で管理し、劣化した土地の回復や生物多様性の損失に終止符を打ち、次世代へ天然資源の恩恵を引き継いでいかなければなりません。そのためには山地の保全活動や生態系を守ることも重要となってきます。

大台町観光振興計画基本体系図

目指す姿

自然と人びとが共生し、未来へつなぐ観光振興

“森にとまる・水とあそぶ大台町”まちのすべてが持続可能なアウトドアフィールド

基本目標1

地域の資源を守り、活かす観光の推進

- ① 地域の特徴・資源を活用した魅力ある観光地づくり
- ② アウトドアアクティビティの充実
- ③ 環境維持協力金制度の確立に向けて

基本目標2

満足度向上とリピーターを増やす観光の推進

- ① 積極的で効果的な情報発信と観光プロモーション
- ② 観光案内所におけるニーズに合った案内
- ③ おおだいファンクラブの確立

基本目標3

観光消費額の増加につなげる観光の推進

- ① 農林漁業など産業を活用したプログラムの展開
- ② 魅力的な滞在コンテンツや体験型サービスの充実
- ③ 道の駅奥伊勢おおだい環境整備
- ④ 三重県・市町連携による観光情報の発信と誘客促進

基本目標4

観光をきっかけとした関係人口増加による観光の推進

- ① 誘客の多角化により関係人口増加につなげる観光の推進

1 策定の経過

年 月	項 目	内 容
令和3年11月	第1回策定委員会	策定委員委嘱、計画案を説明・意見交換
令和3年12月	第2回策定委員会	修正案について意見交換
令和4年1月	第3回策定委員会	修正案について意見交換
令和4年2月	第4回策定委員会	最終案について意見交換
令和4年4月	パブリックコメント募集	計画案を町ホームページで公開し、意見募集

2 策定委員（敬称略・順不同）

策定委員名簿		
井野 和正	大台町商工会事務局	委員長
大西 かおり	NPO 法人大杉谷自然学校	
猿木 茂久	神瀬の未来を語る会	
坂東 千晴	(株) 宮川観光振興公社	
中嶋 友希	ライター	
西口 茉実	大台町観光協会	
野田 綾子	(株) Verde 大台ツーリズム	
吉田 将	エス・パール交通 (株)	

用語解説（あいうえお順）

・インバウンド

外国人が訪れてくる旅行のこと。日本へのインバウンドを訪日外国人旅行または訪日旅行という。

・SNS

ソーシャルネットワーキングサービスの略で、登録された利用者同士が交流できるスマートフォン・パソコンなどの会員制サービスのこと。(Facebook や Instagram など)

・自然環境リテラシー

自然環境を総合的に理解し、自然環境と人間が相互に与え合う影響について深く考察し、体得した知識・技能を正しくわかりやすく伝達・発信することによって、自然環境を守り保全しながら、その魅力を活用できる能力を意味する。

・関係人口

そこに定住する「定住人口」でもなく、観光で訪れて去っていく「交流人口（用語解説 P20）」でもないが、地域や地域の人々と多様に関わる人々のこと。

・コンテンツ

内容、題材。

・交流人口

その地域を訪れる人々のこと。その地域に住んでいる人（定住人口または居住人口）に対する概念である。

・SUP（サップ）

大きめのサーフボードに立った状態で乗り、パドルでバランスを取りながら水面を滑走するアクティビティ。

・サテライトオフィス

企業の本社や主要拠点から離れた場所に設置されるオフィスのこと。

・テレワーク

インターネットなどの情報通信技術を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方。会社に行かずに、自宅や近くにある会社の拠点などで仕事をする事。

・プロモーション

販売を促進するために活動すること。また、その活動。

・ボルダリング

フリークライミングのひとつ。飛び降りられる程度（通常 5メートル 程度）の岩や壁を、ロープを用いずに自由に登るもの。

・マイクロツーリズム

自宅から 1 時間の移動圏内で観光する近距離旅行の形態のこと。

・ワーケーション

「ワーク」（仕事）と「バケーション」（休暇）を組み合わせた造語で、会社員などが休暇などで滞在している観光地や帰省先などで働くこと。